キリスト教と文学

現代日本キリスト教文学全集

現代日本キリスト教文学全集 18 「キリスト教と文学」

著者 椎名麟三・遠藤周作ほか
発行者 武藤富男
発行所 株式会社 教文館
一〇四・東京都中央区銀座四―五―一
振替・東京一一三五七・電(五六一)八四四六
印刷所 伸光印刷株式会社
昭和四九年七月二〇日 初版発行
乱丁・落丁はお取り替えいたします
© 1974
配給元 日キ販 東京都新宿区新小川町3―1 振替・東京60976
電話(260)5664(代)
0393―625180―6100(日キ販)

キリスト教と文学

現代日本キリスト教文学全集

18

教文館

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目

次

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

I

現代文学における前衛的な役割について……椎名麟三…二
文学とキリスト教……遠藤周作…三〇
出会いとしての芸術……佐古純一郎…三六
宗教文学論……笹淵友一…三七

II

原罪の問題——ルター、パスカル、ドストエーフスキー——……森有正…五七
傷める蘆——パスカルの回心について——……佐古純一郎…六八

ルオー……越知保夫…九五
眩暈と想起――私のモーツァルト――……森内俊雄…一〇五
シャルトル――内部からの光――……饗庭孝男…一一四
神父論――シンパからの苦情――……三浦朱門…一一七
父の宗教・母の宗教――マリア観音について――……遠藤周作…一一三
私の遍歴断章――信仰とドラマ――……矢代静一…一四一
復活と私……椎名麟三…一五一
死をおそれて――文学を志す人びとへ――……島尾敏雄…一六〇
福音書の理解……小川国夫…一六六
使徒行録……小川国夫…一六八

復活……小川国夫…一七〇
一九五六年のノートから……石原吉郎…一七三

Ⅲ

ドストエーフスキーにおける神と人……森有正…一八三
小林秀雄とドストエフスキイ——そのキリスト論を中心として——……佐藤泰正…一八八
内村鑑三の日本文学蔑視……柳田知常…二〇九
正宗白鳥の回心をめぐって……兵藤正之助…二三五
太宰治におけるデカダンスとモラル……久山康…二三九
孤独な作家——小山清の死——……斎藤末弘…二五五

救魂の秘祭者・島尾敏雄……武田友寿…二六七
小川国夫小論……饗庭孝男…二七七
答はいらない――曽野綾子『無名碑』――……高見沢潤子…二八二
贖罪と回生の文学――有吉佐和子『恍惚の人』の問題――……武田友寿…二八九
主体の変革と文体の変革――椎名麟三『懲役人の告発』について――……高堂要…二九五
交錯する軌跡――遠藤周作『死海のほとり』――……上總英郎…三〇四
『現代日本キリスト教文学全集』収録作家略歴……三一五

裝幀　熊谷博人

I

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

現代文学における前衛的な役割について

椎名麟三

一

文学は、徹頭徹尾、人間の事柄を問題にする。そのかぎりにおいては、私たちの存在と同じように、その時代や歴史を超えることはできない。これがこの私の小文の大前提である。

この大前提において、この時代に対するさまざまな問題提起となってあらわれていることは、みなさんも御存じの通りである。曰く「組織と人間」、曰く「政治と文学」、曰く「社会と個人」。むろんこの「と」という繋辞は、統一を意味するものではなく、分裂とさらにいえば対立を意味するものなのである。むろん現代は、分裂と対立のお好きな時代であって、この世界からして米ソの二大陣営に分裂し対立していることはいまさらいうまでもないことだ。しかしこれらの問題提起の解決は、対立の一方の項を消し去るという仕方でなされる場合が多い。組織の方が個人の主体より大切だとか、政治が文学より優先するとかしないとか、全く何十年も前に聞いた古い問題のようであるが、現在事あるごとにむし返されている問題でもあるのだ。だが、対立の一方の項を消し去らないにしても、どちらがより重要であるかをきめることによって、この対立の影をうすめたりすることも、何等問題の解決にならないことはいうまでもないことである。

この点においてフルシチョフさんのいう平和なる共存という言葉は、私たちにとって魅力のあるものである。あるところでは二つの自由の共存という言葉をつかっていたようであるが、その魅力は同じことだ。だが、果してそれが可能であるかどうかとなると、私としてはいささか疑問である。対立の共存ということは実に素晴らしい。しかしその対立の一方の項が、共存の根拠になるならば、他の項は、その対立する項にのみ込まれてしまうということは明らかである。アメリカのいう自由が、ソビエトの自由との

対立の共存の根拠になるならば、それはアメリカのいう自由によってその対立が統一されたことになるのであり、いいかえればソビエトの自由の生き得るのは、アメリカの自由を根拠にすることによってだというはなはだおかしなことになるのだ。むろんその逆も同様であることは説明を要しないだろう。平和な対立の共存という言葉の美しさは、いくら繰り返しても足りないくらいだ。だが、その対立を共存させ得る根拠は、そのどちらにもないというのが、現代の現実である。そしてまたその現実は、従来の思想や方法によっても超えることのできない現代の壁であることをも認めずにはいられないのである。

このことは、「組織と人間」だとか「政治と文学」という問題に一つの照明を投げかけている。つまりそれは、問題提起者たちのいうように、どちらをえらぶかという決断を私たちに迫っているのかも知れない。しかし今度の戦争を通過して来た私たちにとっては、対立のどちらの項を抹殺されても、そこで私たちは非人間化されるということを知っているのである。それについて私たちは、戦後、いわゆる戦犯者たちの告白を聞いたはずなのだ。彼等の多くは、「戦争は、ほんとはいやでいやで仕方がなかったが、しかしあの強力な権力下では戦争へ協力せざるを得なかった」といっていたからである。いずれにしろ彼等は、戦争に協力することをえらぶことによって、たしかに自己を客観的に統一することができたのであるが、だが内心の声を殺すことによってそれをなしとげたのであるかぎり、そこで自己に対する非人間化を行ったのだといえるのである。少くとも彼は、自分がほんとうの意味で生きている人間だと感ずることはできなかったにちがいないことは明らかなのだ。

たしかにこの例は（後でもふれるが）、個人の存在自体のなかに分裂と対立の生ずることをも示している。だが、いまは、歴史的な意味においても、対立している二つの自由の共存に、この世界全体の破滅が賭けられているということだけをいっておきたい。その対立の一方の項を消滅させるためには、核戦争は避けられないものであり、しかもそれは人類に対する徹底的な非人間化の遂行となるだろうということである。何故ならばその戦争によって、人類はこの地上から消え去ってしまうかも知れないからなのだ。

対立する自由の平和なる共存、それこそが問題なのである。

二

このような対立は、個人の内部にも存在する。そのことについて、キルケゴールが「死に至る病」で精緻な分析を行っているから、私などの出る幕ではない。しかしキルケゴールの分析において忘れられている点だけはいっておきたい。それは客観的な存在者としての私と主観的な存在者としての私との対立が忘れられているということなのである。私たちは、人々によって見られるものであり、その限りにおいて、この世界と歴史を超えることのできない存在であるということなのである。いいかえれば、この世界のあらゆる事物と同じ存在だということなのだ。

むろん私は、ここで哲学論議をやるつもりは毛頭ないし、その任でもない。ただ私のいいたいのは、もしフルシチョフさんのいう二つの自由の共存が成立するならば、それはまた私たちの主観性と客観性の対立の共存も可能にするものだということなのである。主観性と客観性が鋭い対立を示すのは、死についてであるが、（たとえばどんなに長く生きようとしてもやがては死ななければならないというような対立）、しかしこの対立は、文学の面においても避けることはできないのである。それは「組織と人間」というような問題だけをさしているのではない。より具体的な文学の方法においてもそうであるからだ。

小説の名人といっていいサマセット・モームは、その小説論のなかでこういう意味のことをいっていたと思う。（というのは数年前の「文学界」に訳載されたものだが、どんなに探してもその号が見つからないので、記憶をたどって書く。だが、大綱には誤りはないと思うのである）「つまり小説の方法は、二つに大きく別けられる。一つは一人称で書いて行く方法であり、他の一つは客観的な方法である。だが何れの方法をとるにしても、それに徹し得ないあいまいさが残る」というのである。

このあいまいさを虚無と呼んでもいいのではないかと私は思うのだが、しかしそのことはどうでもよい。ここに主観に全的につくこともできないし、客観にも徹し切れない人間の実存が明確にいわれていると思うのだ。何故そうなのか。それは、一人称の場合は、その人間の主観を通して書いて行くのだから、この世界に対する全的な、いいかえれば客観的な展望は切りすてられるからだ。主人公は、丁度

懐中電灯でわずかに足許を照らしながら闇夜の荒野を歩いて行くというふうな仕方でしか、彼の世界に対することはできない。というよりも彼の世界なんかないといった方が正しいであろう。何故なら彼は、この世界から見すてられている人間のようにしか生きて行くことはできないし、彼に見えるものは、彼の懐中電灯の光の及ぶ範囲だけだという情なさであるからだ。

だが一方の客観的な方法によるものは、作者は、その作品の世界に対して、いわば神の位置に立つ。世界のあらゆるものが明晰だし、たとえ主人公に対しても、作者のこの位置は微動だにしない。全く作者はいい気持になっていいはずなのだ。それだのに何故わが小説の名人モームは、この方法でもあいまいさが残るといって嘆くのか。それはここでは、個人の内面性のなかへふかく入って行くことはできないからである。いいかえれば、白昼に、懐中電灯で足元を照らしながら彼の見ることのできるものしか見ることはできないというふうには描けないからである。つまり主人公の主観は切りすてられ、説明し得るものとしての心理描写がせいぜいそれにとってかわり得るにすぎないからなのだ。

当然ここに要請されるのは、フルシチョフさんの主観と客観の平和なる共存である。そしてこのことが、時代に対してだけでなく、文学においても超えることのできない壁をなしている。だからもし、現代の文学において前衛的な役割をになう文学があるとするならば、この壁を破るものでなければならないことはいうまでもないであろう。たしかに時代も文学もこの壁まで追いつめられてしまっているのだ。そして世界の時代に対する責任を感ずる文学者は、この壁をやぶるいろいろな試みをして来たのである。

三

その第一にあげられるのは、フランスのサルトルを代表者とする実存主義者側からの試みであるだろう。サルトルはその「文学とは何か」のなかで、いささか饒舌ではあるが、この時代的な要請を引受けて次のようにいっている。「われわれはいま一つの務めをもっている。この務めにとって恐らくわれわれは十分に力があるわけではなかろうが（一時代が、才能の不足のためにその芸術と哲学とに欠如した例は、初めてのことではない）、この務めとは形而上

学絶対と歴史的事実の相対性を接合し一致させるような文学、私ならよりよい名がないので大情勢の文学と名づける文学を創造することである。」むろんこの言葉は、現代文学における壁を示しているが、それ以上の何物をも示していない。形而上学絶対としての存在である主観的な自己と、歴史的事実の相対的な存在である客観的な自己とを「接合し一致」させることは簡単なことではないからだ。より正確にいえば、何の媒介もなくこの質のちがった二つの自由の視点を直接に接合したり一致させたりしたりすることは「不可能」であるということである。むろん彼がそれに気付いていないというのではない。「われわれは、（それを実現するために）十分に力があるわけではなかろうが」という前置きがそれを示しているからだ。

その点において、フルシチョフさんの平和なる共存が、接合やら一致やらよりも、事態をもっと現実的にとらえているということができるだろう。そしてサルトルは他の著作のなかで、このフルシチョフさんの考えに近付いている。彼が、主観的なリアリズムと客観的なリアリズムの同時存在としての絶対客観のリアリズムという名を口するときにだ。つまり対立する二つのリアリズムを共存させる根拠として絶対客観のリアリズムを押し出して来たのであるが、しかしその正体については全く不明である。何故なら彼自身、小説の技術として考えられるだけだと逃げているからである。むろん理論的にも絶対客観のリアリズムは、それ自身において成立することはできない。何故なら絶対客観のリアリズムを成立させるための根拠を欠如しているからである。いうまでもなくそれは絶対客観の自由なのだ。どんなリアリズムも自由を光源としないかぎり、この世界を見ることも、だからまたこの世界における何物かを創造することはできないからだ。しかも、その自由において、はじめて私たちは生き得るものとなるのであり、それは私たちの道をも示すものなのだ。だからいうまでもなく、サルトルの絶対客観のリアリズムを成立させてやるために、絶対客観の自由を考えてやるとすれば、その自由の光のなかに神らしい姿のうかんで来ることを避けることはできない。彼の哲学が「神のない神学」（この言葉もよく考えればおかしなものであり、現在の神学に対する痛烈な諷刺絵をつくることもできるだろう）と呼ばれたりする由来は、ここにも一つの大きな原因があるといっていいのだ。いいかえれば、絶対客観のリアリズムが、私たちの生

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo